

# 加藤清正の実像

天正13年(1585)、四国の長宗我部氏を下して四国を平定した羽柴秀吉。秀吉の次なる標的は、怒涛の勢いで勢力を拡大していた九州の島津氏。天正14年、ついに秀吉は島津氏を討つべく軍勢を九州へと進めます。

## 〈8〉清正、九州へ

天正13年(1585)8月に四国を平定すると、秀吉の目はさらに西の九州へと向けられます。その頃、九州では薩摩の島津氏が北に進出し、九州全土をその勢力下に置くほどの勢力を見せていました。島津氏は秀吉が出した停戦命令にも従わず、豊後の大友氏領や九州北部への侵攻を続けます。こうして、秀吉は九州攻めに着手し、まず手始めに天正14年9月頃から毛利氏や長宗我部氏の軍勢を九州へ差し向けます。しかし、戸次川の戦い(現在の太宰市戸次)で大敗するなど島津軍の勢いを止めることができず、ついに秀吉みずから九州へ乗り込みます。

天正15年3月1日、秀吉は8万の軍勢を率いて大坂城を出発します。これより遡ること2か月前の正月1日に秀吉が九州攻めの部隊を編成した際の史料が残されています。それには、主だった家臣の名前とともに各部隊の出発日、率いるべき軍勢の人数が書き上げられ、清正は170人の手勢を率いて秀吉の後備(後方部隊)として3月1日に大坂を出発することになっています。秀吉と行動を共にすると言っても、行列の順序から言えば最後尾に近い位置にあり、秀吉の後ろに付き従う家臣の1人に過ぎません。率いる軍勢の人数は家臣の知行高によって算出されますので、この時期の清正の知行高は4,000石に満たないため170人は妥当な数字と言えるでしょう。ちなみに七本槍の1人である福島正則は先発する主力部隊として1,200人の軍勢を率いて九州に向かっており、この時の清正との格差は歴然です。

さて、秀吉と共に大坂を発った清正は、いつ頃九州へ足を踏み入れたのでしょうか。秀吉に同行した右筆※の1人が書き記した「九州御勤座記」という行軍記録により、九州攻めにおける秀吉の行動が判明します。それによれば、3月25日に赤間関(現在の山口県下関市)に到着した秀吉は、28日に九州へ渡り小倉に入っています。清正が終始秀吉に従って行動したと考



▲泰平寺で秀吉に謁見する島津義久  
「横矢旗 九州征伐図(部分)」熊本博物館所蔵

えるならば、清正も3月28日頃に九州の地を踏んだと推測されます。もちろん、清正にとって初めての九州です。

破竹の勢いで九州を南下した秀吉は、4月11日、ついに肥後国南関へ入ります。おそらく清正も同時期に肥後へと入ったものと思われます。この後、秀吉は13日に高瀬、16日に隈本(熊本)、18日に隈庄、19日に八代を経て、27日に薩摩国出水へと入ります。5月8日に薩摩国川内(現在の鹿児島県川内市)の泰平寺で島津氏の降伏を受け入れて、九州攻めは幕を閉じます。

では、九州攻めで清正はどのような動きを見せたのでしょうか。主力部隊ではないため、戦闘には参加せず目立った働きを見せていませんが、清正の場合、九州平定後の戦後処理に当たっていたことが史料から分かります。「清正記」には、名和顕孝が放棄した宇土城の守備を秀吉から命じられ、肥後の新領主・佐々成政に引き渡したと書かれています。これを裏付ける確かな史料として8月10日に秀吉が清正に出した書状があります。そこで清正は「年貢を集める10月まで肥後の城にいなさい」と命じられています。明確に「宇土城」とは書かれていませんが、「清正記」の記述と合わせて考えれば、清正が宇土城の守備と年貢収納の責任者であったと考えられます。また、年貢の収納時期にあたる10月に出された、「島津義久に米2,000石を渡しなさい」と秀吉が命じた書状からも清正の役割の一端が読み取れます。

このように清正は、華々しい戦場での活躍ではなく、戦後処理というどちらかと言えば地味な任務を忠実に遂行することで秀吉の信頼を勝ち得ていきます。この肥後での経験が後に清正の運命を大きく左右することになります。

※右筆 … 文書の作成・執筆を専門とする者

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。